

超高齢社会の進展はもとより、頻発する自然災害や長引くコロナ禍なども要因となり、地域医療の重要性に改めて目が向けられている。そうした中、地元長崎の特性を生かした独自の実習などを通じ、現場で活躍できる人材の育成に力を注ぐのが長崎県立大学の看護学科だ。教育内容の特徴やそこから得られるものなどについて、卒業生である小林賢吾さんと同学科の片穂野邦子講師に聞いた。

災害看護における重要な視点とは

小林さんは「災害看護専門看護師」としても活動されています。仕事内容などについて聞かせてください。

小林 例えば令和2年7月豪雨の際は、先遣隊として被災地で現地調査を行いました。また、新型コロナウイルスの感染拡大の中で、「生物災害」に当たる事実としてダイヤモンド・プリンセス号などの客船で除染作業やクルーのPCR検査を担当しました。一方、災害時の現地での活動の他、医師や看護師、保健師などからなる医療チームのコーディネートも私たちの大切な仕事です。

——災害看護に関わるようになったきっかけを聞かせてください。
小林 大学の講義にて、海外の災害現場で活躍する看護師の活動を学んだことがきっかけで、その活動ができる病院を選び、現在のように国際救援や国内救護活

現場で生きる“実践的な学び”を追求する 長崎県立大学

「看護学科」編

患者さんの背景に目を向け 日常に戻った後を考えた看護を

個人から地域まで、包括的に見る力を身に付ける実習の経験が今に生きる



小林賢吾 (こばやし・けんご)
熊本赤十字病院 手術センター看護主任
災害看護専門看護師

2005年県立長崎シーボルト大学(現長崎県立大学)看護学科を卒業し、熊本赤十字病院に入職。18年日本赤十字広島看護大学大学院看護学研究科災害看護専門看護師課程修了。19年より災害看護専門看護師として活動。

動を行うに至っています。

片穂野 2009年度のカリキュラム改正で看護基礎教育に災害看護の重要性が盛り込まれました。ただ、歴史的に多くの風水害や噴火災害に見舞われてきた長崎県の大学として、本学科は1991年の開学以来、災害看護を重視しています。小林 地球規模で自然災害が激甚化する今、災害看護の意義はいっそう大きくなっています。私自身は「被災者の方が普段の生活に戻り、日常の笑顔を取り戻すこと」を第一に考え、活動しています。片穂野 重要な視点ですね。先を見ずえて行動する。そのためには次に何が起るのかイメージして行動することが大切です。これは長崎県立大学の看護学科が教育の中で特に大切にしていること

の一つです。熊本地震に直面した就職1

年目の卒業生から、「大学で災害時に何が大事か学べたので、自分が何をすべきか考えることができた」と聞いたときはとても頼もしく思いました。

小林 災害は発生直後だけでなく、何カ月、時には何年にもわたり、被災者の健康や生活に影響を与えます。それを理解して行動できるかどうかは、看護師として本心に大切なポイントだと思います。

片穂野 また、災害看護は特別なものではなく、通常の看護活動の延長線上にあるので、日々、適切な看護に努めることが災害時の実践力につながると思います。——その他に、大学での授業で小林さんの印象に残っているものはありますか。小林 県内の離島に滞在して行った実習

です。島で働く保健師さんの話も聞きながら、島の暮らしや食生活と生活習慣病の関係などを調査しました。

片穂野 「しまの健康実習」は、「災害看護学実習」と共に4年間の総まとめ。暮らしを営む人の日常と非日常の両方に目を向けます。多くの離島を持つ長崎ならではのカリキュラムで、地域の歴史や産業、生活が健康にどんな影響を与えるかを理解することなどが目的です。それぞれテーマを決め、例えば漁師さんの働く環境を理解するために一緒に船に乗ったりして、地域特性や住民の生活に合った健康管理や看護支援を考えます。

小林 実習を通じて、個人、家族、集団、そして地域を包括的に見られたことが、今の仕事でも大いに役立っています。災

害看護でも、個人が必要としているものから地域が求めているものまで総合的に提供していかなければならないので。

片穂野 生活者を起点に、それを支える暮らしや地域を意識できる看護師の育成が今求められています。病気がけがだけに着目するのではなく、その人が生活、仕事の場に戻ったとき、どうしたら健康で、快適な暮らしを送れるかが大事。これもある卒業生から聞いた話ですが、「自然とそうしたことを考えて仕事をしていたら、周りに感心された」とのことです。本学の教育の意義を実感しました。

患者・家族の身近にいる 看護師はチーム医療の要

生活者を起点に、暮らしや地域を意識できる看護師を育成していく

豊かな人間性も備えた リーダー人材を養成する

看護学科では、医療現場で求められるスキルの向上はもちろん、人の気持ちを理解できる豊かな人間性の養成も重視。各現場でリーダーシップを発揮できる人材の育成を目指している。附属病院を持たないため、さまざまな医療機関、施設で実習を行うのも特徴で、これが適応力や社会性を育てることにもつながっている。



——最近では、「チーム医療」の重要性もよく耳にします。

小林 病院でも、被災地でも、それは大前提。医療が高度化している現在、医師が全てを担うことはできません。医療従事者それぞれが専門性を発揮してこそ、確かな医療を提供することができます。

片穂野 中でも看護師は、患者さんやご家族と直接やりとりする機会が多く、幅広い情報を持っているため、チーム医療の要でもあります。長崎県立大学では看護学科と栄養健康学科の学生がグループワークを行うなど、具体的な取り組みを通じて、チーム医療における役割分担と協働について学べるようにしています。

——最後に、お二人の今後の抱負を聞かせてください。

小林 災害医療の分野には「災害関連死」という課題があります。地震や洪水などの直接的な被害から逃れても、避難所や仮設住宅での生活で命を落としてしまう。

地域包括ケアの時代は、従来病院にいた要支援者、要配慮者の人々も地域の中で暮らすことが多くなるため、この課題がいつそうクローズアップされています。そうした中で、健康管理の知識を持つ看護師の役割はとて大きい。人に寄り添う看護を通じて、災害関連死をなくしていくことが私のテーマの一つです。

片穂野 県立の大学としては、地域指向の看護師を育成することが何よりの使命。繰り返しになりますが、「人」とその背景に目を向けられる力を学生のうちから引き出していきたいと考えています。また、知識や技術に加え、想像力や観察力、自身の考えや思いやりを確実に伝えるコミュニケーション力が看護師には必要です。ですから、実習などではそのこともより意識していきたいです。病院や診療所以外にも、看護師が活躍できる場はたくさんありますから、地域に貢献できる人材を一人でも多く輩出したいと思っています。



片穂野邦子 (かたほの・くにこ)
長崎県立大学 看護栄養学部
看護学科 講師

2001年佐賀医科大学大学院医学系研究科看護学専攻修士課程を修了。現在、聖路加国際大学博士後期課程在籍中。県立長崎シーボルト大学(現長崎県立大学)看護栄養学部助手を経て、現職。「成人看護学」「災害看護学実習」「チーム医療演習」などの授業を担当。